

いで、み見れば、昨日小兒のころされて有つる門口に、を狐め狐二疋葛にて頸く、りて死てぞ有ける。此二疋の狐はじめは、我子のたしなめられし事と心得、其恨を報ひつるに、たしなめられしにはあらで、いたはられし事を聞知り、其理にせまりて頸く、りたるにやあらん。こは近き年ごろの事にて、此國府中の人の物語にて聞ぬ。

〔秋里隨筆下〕孝狐死孝

粵に肥前國養父郡小畑むらといへるに仁右衛門といふあり、きはめて家貧しければ、下作をして、漸ほそきけぶりをたてけるが、よはひ五十に傾ければ、農夫の業つとめがたく、竹の皮をもつて小笠をぬひ、老のわざとなして世を過しける。然にひとりの子を持つるが、生得農夫の業をきらひ、山ちかければ、平日に山ふかく入て、鹿兔の類をうち野外に出ては、雉子うづらをと、専殺生を好けるが、遂そのわざに長じ、許多の價を得ける。されども父仁右衛門は、其わざを嫌ひ、おりにふれて異見すといへども、さらに用ず、日終夜終山に入る。頃は秋も末なり、き狐をおとさんため、輪穴を工かけおきけるが、かならず狐を獲こと、夜毎なり、こよひも黄昏より出行ける。父なるものふかくもうれい、三更のころまでも念佛してありける。折しも廿日月のかけいと薄くさしのぼり、秋風薄衣を通して寒く、さながら夜いたく更ぬるよと思ふ時、誰となく外面より仁右衛門が名をさして呼聲頻なり、仁右衛門あやしみ、稱名を止、聞てけるに、まさしく我名を呼ぶ事たしかなりければ、誰なるやと頭をめぐらして見てあるに、こは人ならで障子の外面に狐のかたち忽然とうつりぬ、仁右衛門猶あやしく、汝我名をさして呼ぶ子細かたるべしといふ。野干うなづきて、我こよひ推參せし事、翁にひとつのねがひあり、あはれかなへたびてんやといふ。仁右衛門いらへて、その品によつてかなへ遣すべしといふ。野干禮をなして、そも我は此山僻に住る野狐なり、父なるものひさく病にふして、今なを大事におよべり、よつて兄弟七疋の子狐、父が